

「赤ちゃんのおむつを替える気持ちでやってください」

校 長 武井 正明

教員 8 年目の勤務校。着任初日から嵐のような毎日。問題の起こらない日はない。私は 28 歳で生徒指導主事を任された、というか引き受け手がいなかったのである。

一日は朝 7 時、学校周辺のゴミ拾いから始まる。拾っても拾っても、翌朝にはまた大量のゴミ。これを教頭先生と毎朝一緒に拾っていた。

そんな 11 月県から指導主事の先生を招いて、校内で授業研究会が行われた。

研究会って、こっちはそれどころじゃない。毎日毎日終わりのない生徒指導だ。エライ先生には、授業じゃなくてそっちを見てもらいたい…。

授業後の協議会終盤、司会の先生が「折角の機会ですから指導主事の先生に、何かお訊きしたい方はいませんか？」と言った。

私は「授業とは関係ありませんが…、いや、大きく関係あります。実は毎日毎日私の一日は校舎周りのゴミ拾いから始まります。やっているうちに空しくなってきました。一体どういう気持ちで拾ったらいいのでしょうか？」と、どこにぶつけたらいいのかわからない感情のままに指導主事の先生に質問した。

当時の校長は、後日「おまえは面白いヤツだ!!」と言ってくれる人だったが、私の突然の失礼な、この質問が出た時は、きっと肝を冷やしたことだろう。

するとその指導主事の先生は、優しく微笑んで、

「赤ちゃんのおむつを替える気持ちでやってください」と静かに仰った。

それを聞いて大袈裟に言うと、私は泣きそうになった。この先生はわかってくれている。この先生はホンモノだ。

同時に目から鱗が落ちた。迷いが消え、覚悟が固まった瞬間だった。

そうか…ようし、俺は今から徹底的に子どもたちの目線に下りてやる。飛車角落として、金銀も落として…最後は王将ひとつであいつらと向き合おう。あいつらは何にも教えられてないだけなんだ。教えてこなかった大人が悪いんだ。悪いのは俺たち大人だ。

ただ、それで翌日から劇的に変わるほど甘い世界ではない。苦しい日々がまた続いた。しかし、私の心の姿勢は、全く違ったものになった。

そして 2 年経ったある時、教務室から「そういえば最近非常ベル、鳴らないね」と声が洩れた。そう、必死で戦った一日 12 時間の日々によく出口が見えた瞬間だった。

今思う。あの瞬間は私の教員人生の中で、重要な節目だった。きっと先生は大変な校内事情など百も承知で訪問されたに違いない。今でもあの時戴いた先生の金言が、私の教育の土台になっている。

関根廣志指導主事先生、本当にありがとうございました!!